

# 藤並の森

Vol. 34



▲文学館中庭とモニュメント「土佐文学塚」(作・流 政之)

## リレー随筆

### 極限の孤島から—— 齋藤 慎爾

山形県酒田市の沖合いに浮かぶ飛島に倉橋さんを御案内したことがある。私が満州から引き揚げて来てから、中学時代までを過ごした島で、父の出身地であった。海蝕崖下に蹲るように並ぶ百戸ほどの人家も近年の過疎化で昔日の面影を失い、減少の一途をたどりつつある。

飛島が少しく知られるようになったのは、『日本残酷物語』のベストセラーによってである。叢書の一巻で南京小僧の話が紹介されたのだ。本土から貧農の子どもが、島の労働力の担い手になるため、南京袋に押し込められて連れてこられ、袋を仕立て直した作業服を着たことから、南京小僧と呼ばれたのである。海の真つ直中に孤立し、自然の恩恵からも見離され、流砂の如く埋もれ忘却されていく島人たち——一九八二(昭和五十六)年八月、そんな島に倉橋さんは渡られたのである。

倉橋さんが『バルタイ』でデビューしたとき、私は地方の学生であった。文学サークルに属していた私にとって、『バルタイ』の出現は、『太陽の季節』『飼育』『栖山節考』につぐ文学的事件であった。熱に浮かされるままファンレターを出したことでお近付きになれ、上京後、編集者としての関係が始まる…、孤島行にはそんな背景があった。

倉橋さん側からいえば、「昔、一通の絵葉書をももらった。深い海の色と、群生するトビシマカンゾウのやわらかい橙色が心に残り、「島への思いが急にふくらみはじめた」(飛島・酒田紀行)ということになる。案内係をかって出た私が単に浮かれていたわけではない。渡島したあと、荒天で船が欠航したら? 船酔いは? 国宝級の作家、そう、二十年か三十年に一人

という天才(室生犀星)、「硬質の知性と柔媚な感性、当代きつての前衛作家」(中村真一郎)が、海難事故にでも遭遇したら? と、不安の種は尽きず心配症候群。

ところが「海原は澄みきって雲ひとつない青空を映しだしている。船の人が、こんなに風いだ海は珍しいという」(同)絶好の旅日和。島での一泊二日の間、倉橋さんは散策、島めぐり、釣り、お嬢さんたち(まだかさんが十三歳、さやかさん十歳)と水泳ぎとエネルギーを全開。栄螺、鮑の刺身に舌鼓を打ち、「故郷土佐の鯛の活作りより豪華」と御満悦。私といえばロブグリエの孤島を背景にしたアンチロマン『覗くひと』のモデルとなった島はどこだろうなんてことを考えたり……。

「飛島からは形のない島海山が見えます。しかし見てあるうちに、海の彼方に島海山やその裾野に広がる庄内平野、さらにはその背後に広がる日本といふ国のほうが、むしろ幻想の国のやうに思へてきます」(「地獄の一形式としての俳句」という感想も倉橋さんは別の箇所でも録されている。飛島を素材にした小説は執筆されなかったが、孤島の視点から日本を幻想の国として内視されたことは疑いない。「終始一貫、小説のなかで観念の卵をあたため、抽象の芽に水をやってきた作家」(澁澤龍彦が、いまま少し命長らえ、孤島行の、もうひとつの『暗い旅』を書いてほしかったという想念は今後も消えることはないだろう。

(俳人)

展覧会  
紹介  
EXHIBITION

# 「倉橋由美子 人と文学」展

平成19年  
1月14日(日)  
▼  
3月25日(日)  
企画展示室  
観覧料550円

高知出身の作家倉橋由美子先生が亡くなられたのは、二〇〇五年六月十日、一年半前のことでした。六十九歳という若さでの突然の訃報に、新聞各紙には、驚きと嘆きのメッセージが書き立てられていました。

この度、当館では、倉橋由美子先生の文学的業績を偲び、二〇〇七年一月十四日(日)～三月二十六日(日)まで、「倉橋由美子 人と文学」展を開催いたします。

倉橋由美子、本名熊谷由美子先生は、一九三五(昭和十)年十月十日、現在の香美市土佐山田町に父俊郎さん(歯科医)、母美佐栄さんの長女として誕生しました。私立土佐中学校、高等学校を卒業し、日本女子衛生短期大学などを経て、明治大学文学部フランス語

▲執筆中の倉橋さん(一九六二年夏)

学科に進みました。中学の頃には、日本文学をすべて読破したという才女は、大学時代、カフカやカミュ、サルトルといった人びとから影響を受けながら、強靱な文体意識と批評精神によって構築された寓話的作品『バルタイ』を生み出しました。この左翼

運動をめぐる短編小説は、同大学在学中の一九六〇(昭和三十)年「明治大学新聞」に発表、学長賞を受賞。その際、選者だった平野謙に認められ、雑誌「文学界」に転載されます。この作品は、多くの評論家に高く評価され、芥川賞候補に上がり、翌年には、女流文学賞を受賞し

ています。その後、「蛇」「密告」や書き下ろし小説『暗い旅』などを次々に発表。彼女のいう「乱作時代に突入」一気に文壇の人となりました。しかし、弱冠、二十五才という若さでマスコミにもみくちゃにされた倉橋先生は、一九六二(昭和三十)年、父俊郎さんの死をきっかけに、執筆への意欲を失い一時期文壇から遠ざかります。

その後、NHK高知放送局勤務の熊谷富裕氏と結婚。一九六六(昭和四十)年、アイオワ州立大学創作科に留学。帰国後、作家活動を再開。小説『ヴァージニア』『スマキストQの冒険』などを発表しますが、一九七〇年代には再び活動を休止しています。一九八〇年代になると、シルヴァスタインの翻訳などを中心に三度目の活動を開始。一方で『アマノン国往還記』が泉鏡花賞受賞、『大人のための残酷童話』がロングベストセラーとなり、多くのファン的心を掴みました。没後、サンテグジュペリの翻訳『星の王子様』や『偏愛文学館』が出版されています。

今回の展覧会では、

第一部 倉橋由美子・人

I 幼少時代

II 青春期「文学への目覚め」

III 作家デビュー『バルタイ』

IV 父との別れ

V 結婚

VI アメリカで学ぶ

VII 帰国へ再び執筆へ

VIII ポルトガルへの旅立ち

IX 十年ぶりの長編『城の中の城』

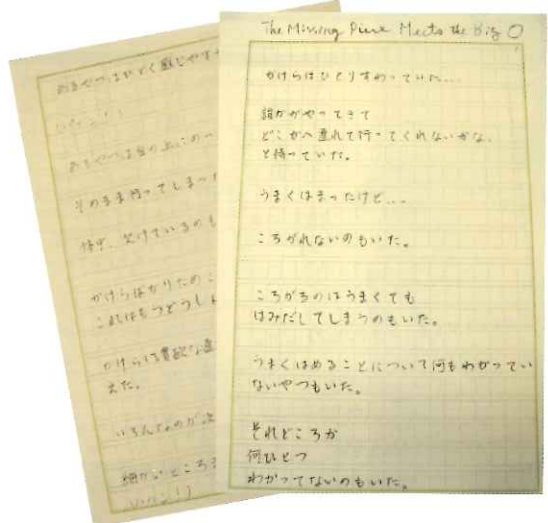
X 終の棲家

第二部 倉橋由美子・文学

I 著書の数々

II 翻訳の数々

III 学位論文



▲『続 ぼくを探しに』の翻訳原稿

展覧会  
Introduction  
紹介

# 高知の文芸同人誌展



平成18年  
10月1日(日)  
▼  
12月17日(日)  
文学館ホール  
観覧料350円

一九四六(昭和二二)年三月十日「詩座」(高知市・宮地佐一郎)と「南海詩人」(土佐清水市・正木聖夫ら)が発刊されました。前年九月、GHQが言論の自由を規制する法令全廃の指示を出し、文学関係では同十一月「文芸首都」の復刊が最初期であったことを考えると、「詩座」、「南海詩人」創刊は大きな意義を持っています。翌年創刊の「蘇鉄」(島崎曙海ら)は六三(昭和三八)年まで続きますが、「詩座」は四七年の十号で終刊、参加同人は新たに「骰子一擲」「朝戸」などを創刊しました。この時期、各同人誌の連絡や作品批評を目的に高知県詩作家同盟が結成されています。

戦後、人々は活字に飢え、古書が飛ぶように売れた時代でした。戦後〜五〇年代にかけては、戦争で中断された文学再生の時代といえます。四九昭和二四)年に芥川賞・直木賞が復活し、翌年には詩対象の「H氏賞」が創設され、新聞社や出版社主催の文学賞の創設が続きます。戦前から文学にかかわってきた人々は、戦中から続く物資不足で紙の調達もままならないなか、取り戻した表現の自由、文学への情熱によって高知の文学を創り出す気概で同人誌を発行しました。この時期は、添田紀三郎らの「昼夜」や萩野誠一郎らの「砂時計」などのように大正生れの人々を中心に、若い世代が加わるかたちで同人誌が創刊されています。

五六昭和三二)年の経済白書で「もはや戦後ではない」と宣言され、時代は高度経済成長期へと向かいます。五七昭和三三)年には「日本文学研究」が創刊、同年開校した高知文学学校の活動からは「高知文学」(六八年)が創刊されることとなります。六〇年代に入ると、昭和生れで戦後に文学活動を始めた世代の同人誌が誕生し始めます。25〜30歳代の文学にじっくり取り組むことができる年齢であり、それぞれカラーのある本格的な同人誌が出されました。また、この時期に創刊された同人誌は安定した発行を続け、大崎二郎、西岡寿美子、発行の「二人」や、坂本稔の「南方手帖」などは、現在まで息の長い活動を続けています。

六〇年代後半から七〇年代は、「高知文芸」(紫藤貞美・六八年)や「高知作家」(松岡俊吉・七三年)、「山河」(島内一夫・七八年)など、高知の書き手による質の高い作品を掲載した雑誌が誕生しました。七四(昭和四九)年には

▼高知の文芸同人誌展 会場



高知ペンクラブによる『高知文芸年鑑』が初めて発行されますが、この頃から個人詩誌の発行が目立つようになってきます。世代間の軋轢を嫌った一匹狼的な活動とも見えるのですが、それぞれの表現を求め、誌名を変えつつ発行を続けています。

八〇年代に入ると、文学学校研究科の書き手による「白色音」などが発行され、戦後生まれの世代が中心となった同人誌が出てきます。九〇年代は長く続いた同人誌が再編成され、また、この時期創刊された「風土」「樹海」「蒼空」などは、戦後生れの世代が質の良い作品を安定して発表する場となっています。

(学芸課／川島郁子)

倉橋由美子  
偏愛文学館

急逝した作家、倉橋由美子が残した至高の言葉。

創作、その軌跡をたどり、著者が愛した作品だけを集めた、37篇、39冊の偏愛書評集

倉橋由美子  
ハルタイ

新潮文庫

IV) 土佐と倉橋由美子  
第三部 倉橋由美子さんを偲んで  
I) 倉橋由美子さんの愛した文学  
II) 倉橋由美子さんの愛した音楽  
美術・映画  
III) 倉橋由美子さんの愛した食

以上のコーナーに分け、主に「遺族が所蔵されている資料を中心に」ご紹介する予定です。また、二月十四日には、オープニングセレモニーを開催。ご遺族や知人の方々とともに、テープカットをおこないます。また、当日は、倉橋先生の親しい友人である、翻訳家 古屋美登里氏に講演をお願いしています。多くの皆様の「来館をお待ちしています。多くの著書を再読してみませんか。

(学芸課／津田加須子)

## 土佐文学さんぽ 32

## 民権文学に生きた男

## 坂崎紫瀾

猪野 睦

高知市廿代町の江ノ口川南側道路に面した道路脇に坂崎紫瀾の碑はあった。「自由民権家坂崎紫瀾邸跡」とほりこんだ碑の横に、プレートにした「民権踊り歌」碑があり、その前に坂崎紫瀾の紹介碑がもうひとつ建っていた。今年の六月に建ったばかりだった。

その紹介碑の後半には「その多才な自由民権活動家の業績を称え、遺徳を偲び、この土地に建立した。二〇〇六年六月 森下義照 美智子」とあった。この土地の所有者森下夫妻による忘れられていく自由民権運動期の文学者坂崎紫瀾の顕彰碑だった。

坂崎紫瀾は自由民権運動が盛りあがっていく高知で、植木枝盛、宮崎夢柳らとならんで口と筆で、言論で、人と時代をまきこみ大きなうねりに仕立てあげていく活動家だった。

嘉永六年、江戸の土佐藩邸で藩医の次男に生まれ、四歳のとき廿代町へ帰ってきた。あと藩校致道館に学び広島、東京に遊学、明治七年には板垣退助が起す愛国公党に参加する。同年には自由民権運動が勢いづいていた長野県の「松本新聞」の編集長となるが、同一三年、「高知新聞」が創刊されると編集長として迎えられる。当時の「高知新聞」は政府権力の弾圧にさらされながら意気盛んだった。その高知に腰をすえ、自由民権運動を盛りあげた。

その頃、七、八月の夕暮れ時になると、高知市を流れる鏡川の南河原で、若い男女の民権踊りが歌とともにやっていた。ゆかたのすそをからげ、ねじり鉢巻の男たちに近くの芸妓も加わり、リズムのいい歌と踊りの輪が広がった。

ジャッパニーズはねなげ泣くか

親もこないか子もないか

親もござんす子もござんす

たった一つの我が自由

鷹めに取られて昨日今日

昨日と思へど二千年

三千万の兄弟と

共に取りたい我が自由

ウラルの山に腰かけて

東を遥かにながむれば

卑屈世界の亜細亜州

地元の盆歌の一部もとり入れて作った坂崎紫瀾の歌だった。ロシアのウラルの山の上から、おくれた

ジャッパニーズを眺める壮大な発想が、若者たちに自由を吹きこみ、その気にさせていく歌だった。「高知新聞」編集のかたわら演説にも力を入れた。

明治一四年、自由党結成報告演説が政談演説禁止令にひっかかり、坂崎紫瀾は一年間の演説禁止処分をうけた。

口を閉ざされると遊芸稼人鑑札をとり、みずから馬鹿林鈍翁と名の講談師になり、東洋一派民権講釈一座を結成する。一座には馬鹿林鈍突、鈍子、鈍々、鈍柳、鈍澤と名の民権家がそろい、明治一五年一月二日から三日間、新地光栄座での興業広告を「高知新聞」にのせた。

講釈はフランス革命、西欧民権百家伝をとり入れ政府を批判、民権をたたえ聴衆を湧かせた。だが二日目に一座解散命令、坂崎紫瀾は投獄された。西欧百家伝ブルタースがひっかかった。皆を湧かす枕のところ、「天子は人民より税を絞り一人安座する。税を取って上位に位するのは

天子と私の二人」とやったのが罪とされた。

この入獄前後に「王陽新聞」に坂本龍馬を

主人公にした小説「汗血千里の駒」をかいて

ベストセラーとなり全国に知られた。坂本

龍馬を自由民権運動の流れにつないだ小説

だった。このあとは明治一七年、東京で「自由燈

」が創刊されると上京、「自由新聞」に「仏国

革命修羅の衝」をかくが、ヴィクトル・ユゴー

の「九十二年」の意訳だった。

明治二六年「土陽新聞」にまねかれ帰郷する

が再上京、大正二年六一歳で没した。自由民権

運動期に政治文学を荷った一人だった。

筑摩書房の明治文学全集「明治政治小説集」

に「汗血千里の駒」が入っている。

本名は坂崎斌、紫瀾は紫の大波、黒潮の流れ、

波頭を連ねた大波だった。ふさわしい名だった。

(詩人)



## 館長室から

## 文学館の仕事

前田 英博

平成18年3月高知県芸術文化振興ビジョンが策定された。この策定に当たって調査された「芸術文化」に関しての調査を見ると、鑑賞した芸術文化のジャンルでは、「美術」が68%、「音楽」が43%、「映画」が37%であるのに対し、「文学」は9%、活動したジャンルでは、「美術」が32%、「音楽」が31%、「映画」が17%であるのに対し、「文学」は6%と、いずれをとっても文学が極端に低いものとなっている。

この結果からして、美術館等と文学館を同じ文化施設として同一の評価方法で評価するのはどう考えても無理がある。他の芸術文化に比べ、県民の関心が低い文学ではあるが、県民が、激動する現在の社会の中で、心を豊かに余裕を持った生活を送るために、文学が果たす役割は非常に大きなものがあると考え、その文学への誘いの場として、また心を養う県民の生涯学習の場として文学館は設置されたものである。

高知県立文学館では、10月から「高知の文芸同人誌展」を開催している。文学館の仕事の中で、企画展等の展示は中心的なものと考えられ、そのテーマの選択によって観客の多少が決まり、成否が論ぜられることがある。

このようなかで、文芸同人誌展は余りにも地味であり、多くの観客を呼ぶとは考えられない。しかしながら、多くの先達達が、共に語り、共に談じあつた後に合体し、分裂を繰り返した結果、現在の高知の文学が現存しているのだ。これらを検証し、資料が散逸しないようにまとめ、後世に残していくのも文学館の大きな仕事だと考えている。

# 資料受贈報告

—最近の寄贈資料から—  
『(新編)くちたんばのんのんき』

田島征彦著 飛鳥出版社  
二〇〇六年七月 A5変形版 二四八頁



▲新編



▼旧編

田島征彦さんは一九四〇(昭和十五)年大阪府堺市生まれ。少年期を父の故郷である高知で過ごしました。六五年京都市立美術大学染織図学科専攻科修了。日本版画協会会員。型絵染とシルクスクリーンで作品を発表。型絵染作品で芸術生活画廊賞(七一年)、フランス美術佳作賞(七四年)、京都洋画新人賞(七五年)などを受賞。絵本も製作し、『祇園祭』(七六年第六回世界絵本原画展金牌受賞)、『じごくのそうべえ』(七八年第一回絵本にっぽん賞受賞)、『火の笛—祇園祭絵巻』(八〇年第三〇回小学館絵画賞受賞)、『はじめてふったゆき』(八九年ライプチヒ国際図書デザイン展銀賞受賞)、『てんにのぼったなまず』(八五年第十一回世界絵本原画展金牌受賞)など多数あります。

受贈報告(平成十八年六月〜八月) 敬称略

- ▼大崎二郎・(詩集)幻日記 大崎二郎著 青帖社
- ▼三木正之・鶴崎博詩集 鶴崎博著 思潮社
- ▼柳川民二・雪ふる夜 柳川民二著・山脇映子 絵こうち童話の会
- ▼市原麟一郎・土佐人シリーズ② 土佐おもしろ人間烈伝 市原麟一郎著 田所のりあき絵 リーブル出版 他
- ▼池内了・寅彦と冬彦—私のなかの寺田寅彦— 池内了編 岩波書店
- ▼小松弘愛・現代日本生活語詩集 現代日本生活語詩集編集委員会編 澤標
- ▼田島征彦・(新編)くちたんばのんのんき 田島征彦 飛鳥出版社
- ▼岸本武・ピンク色の転校生—その少年の甲子園— 岸本武 小学館スクウェア
- ▼小島白秋・(句集)笛鳴 小島白秋・小島小汀著 桃山出版
- ▼郷土出版社・上田自由大学とその周辺 長野大学編 郷土出版社
- ▼片岡千歳・(詩集)最上川 片岡千歳 たんぼほ書店

このほか、全国の個人・関係機関の方々から数多くの資料をご贈りいただきました。厚くお礼を申し上げます。

また、随筆『ピコちゃんを食べた』『くちたんばのんのんき(口丹波呑呑記)』『王様が裸で歩いてるわ—続・口丹波呑呑記』、三十五年の画業をまとめた自伝画集『憤染記』などもあります。

『くちたんばのんのんき』には、七四年から移り住んだ京都丹波地方の風土、家族のことや家族を取り巻く多くの人々の人間模様が一モア溢れる筆致で明るく描かれています。七九年四月品文社から最初の随筆集として発行されました。九〇年頃絶版となっていました。このたび文章に少し手を入れ、『くちたんばの子守唄』と題する数編を新しいものに入れ替えて『新編]くちたんばのんのんき』として装いを新たに刊行されました。田島さんは二〇〇〇年から淡路島に居を移し活動を続けています。

文学館で紹介している約40名の文学者を毎回2名取り上げ、展示資料のエピソードも交えご紹介いたします。下の実線部分を切り取って別に綴じてみてください。5年後には「常設展作家ミニ事典」となります。

# 常設展 虫がめ

たなか こうたろう

田中貢太郎 (二八八〇〜一九四一)



▲「田中家酒宴の図」



## 希くば酒を撮して萬巻の書を読破せんかな

星や月が綺麗に見える季節になりました。毎年、中秋の名所の頃には、高知県の月の名所桂浜で、「名月酒供養」が開催され、地元出身の歌人大町桂月を偲びながら酒を飲み文芸を語り合う催しがあります。この酒供養の端緒を開いたのが大町桂月の愛弟子であった田中貢太郎です。

田中貢太郎は維新後の社会の一面面や風俗をいきいきと描いた「旋風時代」という小説で一世を風靡し、大衆作家としての地位を確立しますが、無名時代には大町桂月、田岡嶺雲、田山花袋などの薫陶を受けました。

非常に人脈を大切にする人で、郷土の先輩であり師である桂月や嶺雲の晩年の世話をし、また、暗に当時の文壇の大御所菊池寛への反逆の意を含んだ随筆雑誌「博浪沙」を創刊し、尾崎士郎、井伏鱒二、馬場孤蝶、浜本浩、田岡

典夫などの後進を育てていきました。酒好きとしても有名で「まえ、ちくと一杯」というのが口癖だったようです。文学館の常設展には「田中家酒宴の図」(複製)が展示されていますが、正面中央の貢太郎のほか井伏鱒二や浜本浩らしき人物も描かれ、当時の和やかな雰囲気がよく伝わってきます。同じ展示コーナー内には、老酒の瓶や銚子といった酒器があります。この酒器が酒宴の図のなかに描かれていますので、来館の際にはぜひ見比べてみてください。

酒好きで情に厚く、大らかだけど権威に屈しないという田中貢太郎は、土佐の風土と精神を代表する典型的な作家といえます。



高知県立文学館 第9回児童生徒文学作品朗読コンクール 朗読審査 & 記念講演会

**入場無料 一般公開**

会場：高知城ホール(4階多目的ホール)

日時：平成18年11月26日(日)13時～

- ・審査(公開)：13時～14時10分
- ・記念講演会：14時20分～15時20分  
※演題「ことばの力 こどもの力」  
講師 中脇 初枝先生
- ・表彰式および講評：15時30分～16時



今年も8月下旬に、県下3会場で小中学生を対象とした朗読コンクール地区審査を行いました。参加校・小学校74校、中学校26校、参加者数・100名の中から、県審査への出場者を決定しました。

**イベント紹介**

地区審査では、朝早くから集まった児童生徒が、お父さん、お母さんや先生に、「緊張する」とか「練習どおり落ち着いてやればいいんだよね」と話しかけている姿が見られ、この日のために一生懸命練習してきた様子がうかがえました。「ご家族やお知り合いなど、たくさんの方の観客のみなさまにお越しいただき、盛況な地区審査となりました。

登場人物の気持ちや作品の情景をイメージして、それを自分の声で表現し伝えようと工夫した朗読が多く、子どもたちの持っている素直でひたむきな思いが伝わってきました。参加した児童生徒にもきっと、良い思い出になったことでしょう。

地区審査で選出されたのは21名。彼らはそれぞれの朗読にさらに磨きをかけ、11月26日(日)に開催される県審査に出場します。ぜひご来場のうへ、子どもたちの一生懸命な朗読をお聞きください。

**講師紹介**

中脇 初枝 (なかわきはつえ)

1974年徳島県で生まれ、高知県で育つ。高知県立中村高校在学中の1991年、「魚のように」で第2回坊ちゃん文学賞大賞を受賞。現在、高知新聞「ちゃあちゃんのむかしばなし」を連載中。



**サイン会開催!!**

コンクール終了後、会場にて中脇先生の本を購入された方を対象にサイン会を行います。本をお持ちになって会場コーナーまでお越し下さい。

ひとはなぜことばをつかうのでしょうか。  
ひとはなぜこどもからおとなになるのでしょうか。  
むかしばなしと、ひとの歴史から見えてきた、ことばの力とこどもの力についてお話しします。  
高知で、みなさんにお目にかかれることを楽しみにしています。

中脇先生からメッセージが届いています!



人はもし闘うならずっと大きな高い目的のために闘うべきです。

**常設展 虫めがね**

たおかのりお  
田岡典夫(一九〇八～一九八二)



▲田岡典夫が描いた「土州しばてん真図」



4

菊池寛に見出された「しばてん覆文書」。この作品は作家・田岡典夫の文壇デビュー作となりました。「しばてん覆文書」は師・田中貢太郎が主宰する「博浪沙(一九四(昭和16)年2月号)に掲載されました。この作品は、田岡典夫が自宅の書庫で見つけた「しばてん覆文書」という5つの書状を讀み下し文にしたものです。伊吾之助という青年武士の切腹の真相に迫る話で、関係者それぞれの口述書で事態がだんだん明らかになり、最後には伊吾之助自身の遺書が出てきて、シバテンと角力をして不覚にも「助けてくれ」と叫んでしまったことを聴じての切腹であったことがわかるのでした。

田岡典夫の作品を誉めるとともに「ここをこう直したら「オール讀物」に掲載してあげるよと約束してくれます。そして田岡典夫は、書状の形態であった「しばてん覆文書」を物語風に書き改め、昭和16年6月号の「オール讀物」に掲載され、文壇デビューを果たしました。

田岡典夫は、自ら「シバテン作家」と称したこともあるほど多くのシバテンものの作品を残しています。昭和34年2月発行の「シバテン群像」の中で、シバテンとは何かを考察し、「シバテン」とは、天狗の幼虫であり、シバテンは人と角力を取ることで、遂に成虫、即ちテングとなり得るのであると書いています。田岡典夫は郷里である土佐の小妖精の絶滅を惜しみ、シバテンに関する作品を発表し、消えんとするシバテンの灯を守るうとしたのでした。

これが当時の文壇の大御所・菊池寛の目にとまり、菊池寛から田岡典夫にあて、一通の激励の手紙が届きます(文学館常設展示に手紙の複製があります。その手紙の中で菊池寛は、



# 高知の文芸同人誌展 記念講演会



「同人誌の〈青春〉」  
講師（詩人） 嶋岡 農 氏

▲講演の様子

高知工業高校での学生時代に作った同人誌「マーキュリーの杖」作成の裏話などが披露され、会場にいらっしゃった当時一緒に活動した仲間の方とのやり取りもありました。

また、明治大学に進学した頃や、昭和38年からほぼ5年間帰高されていた間の様子などの話から、最近のお仕事の中で出会った作家、詩人のことにまで話が及びました。

時間の限られた講演会の中では、用意されていたお話の半分もできなかったとのことで、大変残念なことです。しかし、嶋岡氏でなければ語る事のできないお話を伺うことができ、価値ある時間を過ごすことのできた一日となりました。

# 講 演 会 報 告

10月8日(日)に高知城ホール4F大ホールにて詩人・嶋岡 農氏による記念講演会が開催されました。

「同人誌の〈青春〉」と銘打って、同人誌あるいは文学には青春性が必要との言葉から始まり、嶋岡氏が若い頃に影響を受けた同人誌の紹介を通して、高知の文芸同人誌の流れを振り返るものとなりました。穏やかな話しぶりの中に、ところどころユーモアを交えつつ、まさに戦後高知の文芸同人誌と青春の歩みを共にしてこられた嶋岡氏ならではのお話で、当時の空気までもが鮮やかによみがえってくるようでした。



◀会場風景



第1回

11月23日(木・祝)

同人誌「インテリ」SPACE」所属  
菅野 笛子さん

現在、高知で刊行中の同人誌にて活躍中の詩人による自作詩の朗読。音楽や語りとともに、作者ならではの世界観を耳で感じてみませんか？

## 朗読イベント 「自作を読む」

第2回

12月3日(日)

同人誌「南方手帖」編集発行  
坂本 稔さん

※両日とも午後2時～3時  
※両日とも定員30名程度  
(事前申込不要)

## 高校生によるガリ版合同文芸誌づくり

参加校の文芸部員が自分たちの作品をガリ版で刷ります。12月2日(土)にはそれらをまとめて製本し、合同文芸誌を完成させます。(限定100部で2日以降、無料配布いたします)



11月11日(土)・18日(土)  
・25日(土)・12月2日(土)

※各日とも午前9時～12時、  
午後1時～4時頃まで活動

※会場：すべて高知県立文学館 1Fホール  
高知の文芸同人誌展会場内  
イベントスペース

※各イベントとも、**観覧料350円**  
(高校生以下無料)が必要です。

## 高知の文芸同人誌展 関連企画のご案内



ブンガクな時代をもっと楽しもう！

## 座談会 「ブンガクな時代を語ろう ～世代を超えた熱き思い～」

高知の文学を引っ張ってきた大人と、文学を志す現代の高校生が、ブンガクについて熱く語り合います。イマドキの若者と、かつての文学青年の刺激的な出会い。

11月12日(日) ※午後2時～3時  
※定員 30名程度 (事前申込不要)

※定員 30名程度  
(事前申込不要)

11月19日(日)

※午後2時～3時

「高知の同人誌あれこれ」  
高知の同人誌をリアルタイムで見つめてこられた詩人 猪野睦氏が、戦後から60年代を中心とした同人誌のエピソードをお話しくださいます。高知の同人誌の軌跡をダイブにお楽しみください。

## ギャラリー トーク

## 「ガリ版で、年賀状。」

今年は手作りで年賀状を作ってみませんか？ガリ版の原理を身近な素材で再現します。親子での参加、大歓迎！

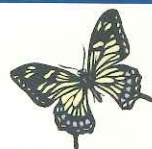
12月9日(土) ※午前9時30分～午後3時頃  
(お昼の休憩 1時間)

※事前申込が必要です。先着15名。(TEL:088-822-0231まで)  
※刷りたい枚数の年賀状をご持参ください。  
※昼食は各自ご用意をお願いします。



企画展  
案内

寄贈記念「宮尾登美子の世界Ⅴ」  
最新の宮尾文学と天璋院篤姫



平成18年11月3日(金)～12月26日(火) (※会期中 休館日なし)

場所：文学館常設展示室2 観覧料：350円(常設展含)

5回にわたって開催した、寄贈記念展の最後を飾るにふさわしい魅力あふれる資料を一同に展示します。どこよりも早く現在連載中の作品や2008年大河ドラマの原作である「天璋院篤姫」の原稿もご紹介いたします。80歳をむかえられ、ますます筆冴える最新の宮尾文学をご堪能ください。

2008年  
大河ドラマ  
原作原稿  
公開!



高知の文芸同人誌展

平成18年10月1日(日)～12月17日(日)

場所：文学館ホール

観覧料：350円(常設展含)

戦後～80年代を中心に高知の文芸同人誌活動の軌跡を追い、高知の文学活動の諸相を紹介いたします。



「倉橋由美子 人と文学」展

平成19年1月14日(日)～3月26日(日)

場所：企画展示室

観覧料：550円(常設展含)

高知県出身の作家倉橋由美子の文学的業績を、人・文学・倉橋由美子さんを偲んでの3コーナーで紹介いたします。



高知城築城と山内家のくらし

平成18年10月21日(土)～12月26日(火) 観覧料：一般300円

文学館2階 企画展示室にて

※休館日：年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休。

イベント  
案内

第9回 児童生徒文学作品朗読コンクール

◆県審査(公開)表彰式・記念講演会も開催!

会場：高知城ホール(4F多目的ホール)

日時：11月26日(日) 午後1時～

地区審査で選出された児童生徒の公開審査および表彰式・記念講演会を開催します。



・記念講演会：14時20分～15時20分

※演題「ことばの力 こどもの力」  
講師 中脇 初枝先生

・表彰式および講評：15時30分～16時

※審査の進行状況によりますので、時間は予定です。  
※審査中は会場への入退場をご遠慮ください。  
※記念講演会のみの特講も可能です。



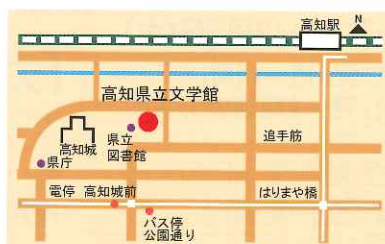
サイン会  
開催!!

コンクール終了後、会場にて中脇先生の本を購入された方を対象にサイン会を行います。本をお持ちになって会場コーナーまでお越し下さい。

利用案内 基本データ

開館時間 午前9時～午後5時(入館は、午後4時半まで)  
休館日 なし  
観覧料 一般350円  
特別企画展のあるときは、料金が変わります。20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者及び身障者手帳、療育手帳、障害者手帳、戦傷病者手帳及び被爆者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。なし。ただし近辺に有料駐車場があります。  
駐車場 ホール、ミュージアムショップ、閲覧室、茶室「慶雲庵」  
附帯設備 企画展示室、ホール、茶室  
貸出施設

交通のご案内



- 高知空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
- JR高知駅下車徒歩20分
- 土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
- バス停公園通り下車北へ徒歩5分



高知県立  
文学館

〒780-0850

高知市丸ノ内1丁目1-20

電話 088-822-0231

FAX 088-871-7857

E-mail: bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp

http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/